

第三節 葦手本の位置

一

葦手本は上下二巻の完本である。葦手本という名称は、上下二巻に亘り、裝飾下絵に葦手が描かれていることに因る。

下巻巻末の奥書「永暦元年四月二日右筆贖之司農少卿伊行」により、永暦元年（一一六〇）、藤原伊行（生年未詳―一二七二以後）によって書写されたことが知られる。完本であることに加え、書写者・書写年時が明確であり、書の家である世尊寺家第六代目の伊行の手になる等、その資料的価値は極めて高い。

葦手本について、堀部正二氏は、（雲紙本・関戸本と）「かなりの異同を有してゐるが、近似の特異本文を共有する点も多いので便宜これらをもつて一類とする」とされた上で、雲紙本・関戸本類のものとされた^①。また、久曾神昇氏も、雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本の四本を同類とされ、それらを雲紙本・関戸本と卷子本・葦手本とに二分された^②。すなわち、堀部・久曾神両氏の御論は葦手本が卷子本とともに雲紙本・関戸本と同類であるという点において一致している。

また、久曾神氏は、「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」と推測された。そして、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであらう」とされ、**甲類**の雲紙本・関戸本を「初稿本」、**卷子本**・葦手本を「再稿本」、**乙類**の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた^③。

しかしながら、葦手本はそこには位置付け難い。それは本書（前節）中、述べた通り、卷子本についても同様に考えられる。以下、その問題を中心に、葦手本の位置に関して検討を行った結果について述べる。

まず、形態的な面について述べる。

調査し得た諸伝本の詩歌句のうち、伝本相互の間では「詩歌句の有無」がみられる場合と「排列に異同」がある場合とがある。そのうち、諸伝本の関係を見るために、一本のみが異なる場合（ここでは独自事象と称する）を除外してみると次に羅列するように、「A詩歌句の有無」は二六か所、「B排列の異同」は六か所となる。

A詩歌句の有無―独自事象は除外―

▽…粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない箇所。

■…葦手本と粘葉本類とが一致している箇所。

□…葦手本と雲紙本類とが一致している箇所。

▽①17有（雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦）

無（巻・戊）

■②42有（粘・伊・久・巻・下・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

□③215有（粘・伊・久・山・多・戊）

無（雲・関・巻・葦）

□④268有（粘・伊・久・巻・山・戊）

無（雲・関・葦）

▽⑤313有（雲・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（関・巻・和1）

■⑥ 321 有(行大・粘・伊・久・唐²・卷・山・多・戊・葦)
無(雲・閔)

□⑦ 322 有(行大・雲・閔・久・卷・和¹・山・多・戊・葦)
無(粘・伊)

□⑧ 354 有(粘・伊・久・山・戊)
無(雲・閔・卷・葦)

■⑨ 380 有(粘・伊・久・卷・山・戊・葦)
無(雲・閔)

▽⑩ 407 有(雲・閔・粘・法・伊・久・益・山・戊・葦)
無(卷・太)

▽⑪ 422 の次⁴ 有(益・山)
無(雲・閔・粘・伊・久・卷・下・戊・葦)

▽⑫ 434 有(雲・閔・粘・久・卷・山・戊・葦)
無(伊・太・大内)

▽⑬ 433 の次 有(伊・太・大内・山)
無(雲・閔・粘・久・卷・戊・葦)

■⑭ 449 有(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)
無(雲・閔)

□⑮ 534 有(粘・近・伊・久・卷・太・下・山)

無(雲・関・戌・葦)

▽①⑥ 535 有(関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戌・葦)

無(雲・卷)

■①⑦ 564 有(粘・近・伊・久・卷・山・多・戌・葦)

無(雲・関)

□①⑧ 603 有(粘・近・伊・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戌・葦)

▽①⑨ 617 有(雲・関・粘・法・伊・久・下・山・戌・葦)

無(安・卷)

▽②⑩ 621 有(雲・関・粘・伊・久・山・戌・葦)

無(安・卷)

▽②⑪ 652 の次 有(安・卷・定大)

無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戌・葦)

■②② 712 有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

■②③ 714 有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

■②④ 729 有(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戌・葦)

無(雲・関)

■ 25784 有(粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

無(雲・関)

□ 26797 有(粘・近・伊・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戊・葦)

右の二六か所のうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分かち得ない▽印を付した一〇か所(①⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑)を除くと、葦手本は粘葉本類とは■印を付した九か所(②⑥⑨⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕)が一致しており、また、雲紙本類とは□印を付した七か所(③④⑦⑧⑮⑱㉖)が一致していて、数の上からはやや粘葉本類に近い。しかし、■印の九か所の全てにおいて、雲紙本と関戸本のみに無いということは■印の箇所はむしろ雲紙本と関戸本との近い関係を示すものとみられる。

次に、詩歌句が無い場合について注目すると、④(268)では雲紙本類・葦手本に無く、③(215)・⑧(354)は雲紙本類・卷子本・葦手本に無く、また、⑮(603)では、それらに加え、戊辰切にも無く、また、⑮(534)では、雲紙本類・戊辰切・葦手本に無いことが知られる。

排列についても、「A詩歌句の有無」に関する考察で行ったと同様、ある伝本の排列が他本の排列と異なる箇所のうち、一本のみが他本と異なる場合(独自事象)を除外すると次の六か所となる。諸伝本間において排列に異同がある部分の詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

B 排列の異同——独自事象を除外——

(1) 110・111 (雲・関・粘・伊・久・卷・山・戊)

111・110 (唐2・葦)

(2) 137↘143・133↘136 [卷上・「春」部「躑躅」・「款冬」・「藤」] (雲・関・卷・山・戊・葦)

133↘143 [卷上・「春」部「藤」・「躑躅」・「款冬」] (粘・伊)

(3) 201 (雲・関)

201・202 (粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

(4) 273・272 (雲・関・久・唐2・卷・山・戊・葦)

272・273 (粘・伊・多)

(5) 309・308・310 (雲・関・久・山・戊・葦)

308・309・310 (粘・伊)

309・310・308 (卷)

(6) 313・312 (雲・葦)

312・313 無(関・卷・和1)

312・313 (粘・伊・久・山・戊)

久曾神昇氏が葦手本を雲紙本類に分類された主な論拠の一つには、右のうちの(2)卷上・「春」部卷末の三詩歌群の排列の異同のことが挙げられる。すなわち、粘葉本類の「藤」・「躑躅」・「款冬」に対して、葦手本では雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順である。たしかに、この排列は諸伝本の系統を考える際、重視しなくてはならない箇所ではあるが、葦手本は右の(3)のごとく、粘葉本類とも同事象を有しており、既述した「A詩歌句の有無」と同様、「B排列の異同」からも、単に雲紙本類として扱えるものではない。

「A詩歌句の有無」・「B排列の異同」において、葦手本と諸伝本とが同事象である箇所数を挙げると以下の通りである(それぞれの下段は対照箇所数、上段は同事象数を示す)。

戊辰切…27/31 久松切…23/30 山城切…22/31 卷子本…21/31 粘葉本…20/31 伊予切…18/31 雲紙本…18/31 関戸本…17/31 唐紙切⁽⁶⁾2…4/4
唐紙切2は、四か所の全てが葦手本と同様で、その他の伝本については、多い順に戊辰切・久松切・山城切・卷子本が挙

げられる。

唐紙切2は、『和漢朗詠集』全詩歌句数のうち、約一三%しか現存していない（和歌四四首、漢詩六四句）のにも関わらず、葦手本とのみ排列が一致する箇所が「B排列の異同」において、(1)に確認されるのは注目値する。

以上、詩歌句の有無について検討した結果、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首を除外すると、葦手本は粘葉本類とは九首、雲紙本類とは七首が一致しており、数の上からは少々、粘葉本類よりであった。が、その一致する箇所の全では雲紙本と関戸本の二本にのみ無い詩歌句であった。また、粘葉本類にあつて雲紙本類に無い詩歌句についてみると、葦手本は雲紙本類と五か所が一致していた。

排列についても、葦手本は粘葉本類の要素を有していた。(2)において述べた如く、粘葉本・雲紙本両類の形態を特徴づけているともいえる、卷上・「春」部卷末の三詩歌群が、雲紙本類と同じく、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であり、加えて、唐紙切2とのみ同排列である箇所も注目される。

なお、葦手本の独自事象は以下の通りである。

◆90無(葦)

有(雲・関・粘・伊・久・卷・山・多・戊)

◆738無・739無(葦)

有(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊)

◆740無(葦)

有(雲・関・雲切・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊)

◆741無・742無・743無・744無(葦)

有(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・多・戊)

◆745無(葦)

有(雲・関・粘・近・法・伊・久・安・巻・太・山・戊)

葦手本には90が無く、また、738(下巻「交友」の後半)より745(「懷旧」)までがまとまって存せず、久曾神氏のご指摘の通り、それら九首はおそらく葦手本の脱漏であると思われる。

三

個々の本文を考察した結果について述べる。

たとえば、119「織自何糸唯暮雨裁無定様任春風」の傍線箇所「裁」は卷子本にのみ「裁」とあるが、これは詩の内容からみて明らかに誤写とみられる。葦手本と同類とされる卷子本は諸伝本中、最も独自本文の、それも誤写と思われるものの多い伝本で、諸伝本の関係について考察する際、このような本文は実質的な異同箇所と同じレベルでは扱いがたい。したがって、ここでは独自本文は対象外とした上で、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として全文に亘って異同調査を行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

【諸伝本間の本文異同調査表】

革手本	戊辰切	山城切	卷子本	唐紙切2	安宅本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌詩
158	158	159	159	24	21	157	160	20	57	160	160		雲紙本
89	83	100	106	14	6	92	75	11	23	72	147		
56.3	52.5	62.9	66.7	58.3	28.6	58.6	46.9	55.0	40.4	45.0	91.9		%
158	158	158	158	24	21	157	160	20	57	160		294	関戸本
89	80	104	104	13	5	88	72	13	22	69		269	
56.3	50.6	65.8	65.8	54.2	23.8	56.1	45.0	65.0	38.6	43.1		91.5	%
160	158	158	158	25	21	157	160	21	58		312	294	粘葉本
77	83	59	82	13	13	107	152	21	52		115	126	
48.1	52.5	37.3	51.9	52.0	61.9	68.2	95.0	100.0	89.7		36.9	42.9	%
57	57	57	58		17	55	58	19		171	168	157	近衛本
31	31	19	26		9	40	49	18		159	68	80	
54.4	54.4	33.3	44.8		52.9	72.7	84.5	94.7		93.0	40.5	51.0	%
20	20	19	20		9	20	20		53	60	60	60	法輪寺切
16	13	9	12		7	17	19		49	58	28	31	
80.0	65.0	47.4	60.0		77.8	85.0	95.0		92.5	96.7	46.7	45.0	%
159	158	159	159	25	21	157		60	170	315	312	293	伊予切
81	83	62	89	15	15	110		60	160	301	118	132	
50.9	52.5	39.0	56.0	60.0	71.4	70.1		100.0	94.1	95.6	37.8	45.1	%
155	155	155	155	23	21		311	60	172	312	309	291	久松切
98	92	82	97	18	13		210	44	125	217	141	149	
63.2	59.4	52.9	62.6	78.3	61.9		67.5	73.3	72.7	69.6	45.6	51.2	%
21	21	20	21			71	71	18	66	71	70	67	安宅本
16	12	4	14			39	36	7	35	34	27	25	
76.2	57.1	20.0	66.7			54.9	50.7	38.9	53.0	47.9	38.6	37.3	%
24	24	24	23			23	26			26	24	23	唐紙切2
21	13	11	15			15	12			10	14	12	
87.5	54.2	45.8	65.2			65.2	46.2			38.5	58.3	52.2	%
158	156	157		26	70	303	305	58	167	308	298	287	卷子本
99	97	88		15	61	184	170	30	89	165	125	129	
62.7	62.2	56.1		57.7	87.1	60.7	55.7	51.7	53.3	53.6	41.9	44.9	%
157	157		297	26	67	304	307	60	167	307	306	287	山城切
80	77		177	19	35	213	188	40	100	184	167	164	
51.0	49.0		59.6	73.1	52.2	70.1	61.2	66.7	59.9	59.9	54.6	57.1	%
156		302	299	24	71	308	311	60	171	312	308	292	戊辰切
109		201	196	16	40	216	212	36	116	209	142	152	
69.9		66.6	65.6	66.7	56.3	70.1	68.2	60.0	67.8	67.0	46.1	52.1	%
	301	291	293	25	64	296	305	58	161	306	300	282	革手本
	231	183	201	25	38	199	183	37	106	179	144	153	
	76.7	62.9	68.6	100.0	59.4	67.2	60.0	63.8	65.8	58.5	48.0	54.3	%

葦手本と粘葉本とは、和歌は四八・一％、漢詩は五八・五％、葦手本と雲紙本とは、和歌は五六・三％、漢詩は五四・三％がそれぞれ一致しており、葦手本の、粘葉本類、雲紙本類への大きな偏りはないものである。しかし、漢詩においては、他の伝本に対して雲紙本と関戸本にのみみられる本文箇所が四七か所もある。そのことから数値上では諸伝本と雲紙本類とが遠い関係にある。その点を考慮し、漢詩における個々の異同について検討すると、葦手本は粘葉本類と雲紙本類の中間的なところでありながらもやや雲紙本類よりに位置しているといえる。

次に、葦手本との同文率については、高い順に、和歌は、唐紙切²（八七・五％）、法輪寺切（八〇・〇％）、安宅切（七六・二％）、戊辰切（六九・九％）、漢詩は、唐紙切²（二〇〇％）、戊辰切（七六・七％）、卷子本（六八・六％）が挙げられる。ここから、概略的に、葦手本は、和歌・漢詩ともに唐紙切²と近い関係にあることが知られる。以下、その具体例を挙げる。葦手本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、諸伝本間の異同を示す。

(1) 25 ももしきのおほみやひとはいとまあれやさくらかさして今日をくらしつ（葦）

〈同〉 けふをくらしつ（唐²）

〈異〉 けふもくらしつ（粘・戊）

けふはくらしつ（雲・関・伊・久・卷・益・山）

下の句は諸伝本とも『万葉集』1883「梅をかさしてここにつとへる」系の本文（『赤人集』I 176・『古今六帖』237も）ではなく、「けふくらしつ」系の本文である。『赤人集』II 57にも「けふも暮らしつ」とあり、歌の内容からも、葦手本・唐紙切²の「今日をくらしつ」は誤写とみられる。

(2) 76 鑽沙草只三分許跨樹霞光半段余（葦）

〈同〉 光（唐²）

〈異〉 纒（雲・関・粘・伊・久・卷・大内・山）

『菅家文章』445、「纔」。葦手本・唐紙切2に「光」とあるのは、前詩(75)「霞光曙後殷於花草色晴来嬾似煙」に「霞光」とあるのに引かれての誤写とみられる。

(3) 152 空窓閑蛩度後五更軒白月初(葦)

〈同〉五(唐2)

〈異〉深(雲・閑・粘・伊・卷・山・戊)

「五更」は一夜を五分した最後の時刻のことであるので、深夜の意の「深更」とは意を異にする。

(4) 250 楊貴妃婦唐帝思李夫人別漢皇情(葦)

〈同〉別(唐2)

〈異〉去(雲・閑・粘・伊・久・卷・山・多・戊)

『類聚句題抄』所収の順詩「対雨恋月」には諸伝本のごとく「去」とある。「李夫人別漢皇情」の典拠は白居易の「李夫人」であり、その詩に「漢武帝初喪李夫人」とあり、「去」は死を意味していることが知られる。葦手本・唐紙切2ではそこから類義語「別」に派生したのであろうか。

(5) 334 蒼苔路熟僧歸寺紅葉聲乾鹿在林(葦)

〈同〉熟(唐2)

〈異〉滑(行大・雲・閑・粘・伊・久・卷・山・戊)

葦手本・唐紙切2の本文「熟」は諸伝本の「滑」と異なり、この句の作者である温庭筠の詩集『温飛卿集』・『温庭筠詩集』の本文に一致している。

葦手本と唐紙切2の「熟」が原詩通りであった可能性が考えられ、諸伝本では原詩の本文「熟」がよりなじみのある「滑」に改変されたとも推測される。他の諸伝本に対して原詩通りと思われる本文が葦手本と唐紙切2の二本にのみみられるとい

う事実は注目に値する。

以上のごとき共通の異文は葦手本と、戊辰切・卷子本・安宅切にもそれぞれ同様にみられる。葦手本と戊辰切には四か所、葦手本と卷子本には五か所、葦手本と安宅切には一か所が確認される。次に一例ずつ示す。葦手本の本文を載せ、当該箇所
に傍線を付し、諸伝本間の異同も示す。

▼葦手本と戊辰切

○612 神川の清流に濯てし我名をさらにまたやくたさむ(葦)

〈同〉 またやくたさむ(戊)

〈異〉 またやくたさむ(雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・山)

『水原抄』、「弘仁五年玄寶初任律詩辞退歌云三輪川清流洗衣袖更不穢云々」。『袋草紙』・『和歌葦蒙抄』『発心集』・『古事談』、
「またやくたさむ」。他文献に「またやくたさむ」の本文は見当たらない。

▼葦手本と卷子本

○388 水消漢臣應疑霸雪盡梁王不召枚(葦)

〈同〉 臣(卷)

〈異〉 主(雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊)

右の句中の「霸」は「漢主」(光武皇帝)の臣「王霸」のことである。⁽⁸⁾当該箇所について、葦手本・卷子本の「漢臣」は誤写
とみられる。

▼葦手本と安宅切

○724 老眼早覚常残夜病力先衰不待年(葦)

〈同〉 眼(安)

〈異 眠（雲・関・粘・近・伊・久・卷・山・戊）

『白氏文集』卷五十八「睡覺」。当該箇所「眠」。しかし、『和漢朗詠集私注』⁽⁹⁾では、当該箇所は葦手本・安宅切と同様、「眼」とあり、これにより、安宅切・葦手本の本文「眼」が普及したであろうことが推測される。

なお、以下、葦手本が粘葉本類・雲紙本類とそれぞれ同文である事例を挙げる。葦手本の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間の異同も示す。

□ 葦手本が粘葉本類と同文である場合

62 さくらはなはるくははれるとしたにもひとのころにあかれやはする（葦）

〈同〉 あかれやはする（粘・伊・戊）

〈異〉 あかれやはせぬ（雲・関・久・卷・山）

536 向曉簾頭生白露終宵床底見青天（葦）

〈同〉 曉（粘・近・法・伊・久）

〈異〉 晩（雲・関・卷・太・下・山・戊）

□ 葦手本が雲紙本類と同文である場合

142 かはつなくかみなひかはにかけみえていまやさくらんやまふきのはな（葦）

〈同〉 いまやさくらん（雲・関・卷・益・山・戊）

〈異〉 いまやちるらん（粘・伊）

573 不独終身数相見子孫長作隔牆人（葦）

〈同〉 不（雲・関）

〈異〉 可（粘・近・伊・卷・山・戊）

何（久）

粘葉本・雲紙本両類の本文を有していることについて、葦手本と同様、十二世紀の書写とされている伝本群にもいえることである。粘葉本類と雲紙本類の本文が対立する箇所（和歌・六九か所、漢詩・一三六か所）において、当該伝本がこの両類と同文箇所を有する数を（括弧内は百分率で）示すと次の通りである。

	和歌の同文箇所数		漢詩の同文箇所数	
	粘葉本類	雲紙本類	粘葉本類	雲紙本類
久松切	三七（五三・六％）	二八（四〇・六％）	八五（六二・五％）	四八（三五・三％）
唐紙切 ²	四	二	二	六
卷子本	一二（三一・九％）	四四（六三・八％）	七五（五五・一％）	五二（三八・二％）
山城切	一三（一八・八％）	五〇（七二・五％）	七一（五二・二％）	五七（四一・九％）
戊辰切	三一（四四・九％）	三二（四六・四％）	八四（六一・八％）	四五（三三・一％）
葦手本	二六（三七・七％）	四一（五九・四％）	七〇（五一・五％）	五八（四二・六％）

右の伝本のうち、粘葉本類に近いのは和歌・漢詩ともに久松切（和歌五三・六％・漢詩六一・五％）、戊辰切（和歌四四・九％・漢詩六一・八％）が挙げられる。

また、和歌において雲紙本類に稍々近いのは山城切（和歌七二・五％）、卷子本（和歌六三・八％）、葦手本（和歌五九・四％）である。ただし、葦手本は、漢詩においては粘葉本類との同文率が五一・五％であり、雲紙本類より粘葉本類の本文を多く有しているということが窺われる。しかし、これは漢詩においては他の諸伝本が同文であり、かつ、雲紙本と関戸本の二本にのみみられる箇所が四七か所もあり、雲紙本と関戸本との密接な関係が影響していると推察される。その点を考慮すると、

葦手本はどちらかと言えば雲紙本類の本文をより多く有しているといえる。

以上、本文について検討した結果、葦手本は、少々雲紙本類より位置していることが知られたが、粘葉本類の要素をも有していた。さらに、葦手本は、唐紙切²と共通の異文を有しており、この二本はきわめて近い関係にあることも知られた。また、横の繋がりにおいては、葦手本は戊辰切・卷子本・安宅切等とも連関性を有していることが確認された。粘葉本・雲紙本両類の要素を有している事象は、葦手本のみならず、十二世紀書写と推定されている諸伝本にも看取される。

四

葦手本には粘葉本・雲紙本両類の要素が混在していることが認められたが、葦手本と同様、十二世紀書写とされている久松切・安宅切・卷子本・山城切・戊辰切も、粘葉本・雲紙本両類の要素を有しているという点で共通していた。ただし、その六本の中で、葦手本を除く他本では一首中、雲紙本類と粘葉本類との混有かと思しき本文がいくつか確認されるが、葦手本にはそれは稀である。

167 まつかけのいはるのみつをむすひつつなつなきとしとおもひけるかな

① むすひつつ (粘・伊・葦)

むすひあけて (雲・関・久・行金・卷・益・山・多・戊)

② おもひけるかな (粘・伊・久・行金・卷・益・山・多・戊・葦)

おもひぬるかな (雲・関・卷)

765 かくはかりへかたくみゆるよのなかにうらやましくもすめるつきかな

① かくはかり (粘・近・法・伊・安・戊・葦)

しはしたに (雲・関・久・卷・太・山)

②へかたくみゆるよのなかに〔粘・近・法・伊・久・卷・安・戊・葦〕

へかたかりけるよのなかを〔雲・関・山〕

へかたかりけるよのなかに〔太〕

167では、久松切・山城切・戊辰切には①が雲紙本類と同文で「むすひあけて」とあるのに対して②は粘葉本類と同文で「おもひけるかな」とある。また、765においても、久松切と卷子本には雲紙本類と同文で①「しはしたに」とあるのに対して②は粘葉本類と同文で「へかたくみゆるよのなかに」とある。このように葦手本は、久松切・卷子本・山城切・戊辰切などと同様に粘葉本・雲紙本両類の本文を有しているものの、その四本ほどは混淆の様相を呈しておらず、それらの中では古い本文に遡り得る性格であると想像される。この葦手本の性格は、以下述べる形態的な面においても見て取ることができる。

第一点目。『和漢朗詠集』の題には付項目を有する場合がある。次に挙げる本文中の題、①「雁」の付項目「帰雁」、及び②「氷」の付項目「春氷」が題として独立している事例には山城切・戊辰切などがある（当該箇所には傍線を付す）。しかし、葦手本にはそのような題は見当たらない。

①雁付帰雁（雲・粘・伊・久・唐2・散・和1・葦）

雁（関・卷）

雁付帰雁 帰雁（山・戊）

②氷（雲・卷）

氷付春氷（関・粘・伊・久・多）

春氷付（下）

氷付春氷 春氷（山・戊）

氷付春氷（葦）

この点について、堀部氏は、撰者である藤原公任の原撰本には「帰雁」・「春氷」は存せず、「帰雁」・「春氷」が題として独立している事象を「後世的な要素」とされた。⁽¹⁾

第二点目。卷子本と戊辰切には、630「みわたせは」歌が16「たにかせに」歌の次に重出しており、また、戊辰切には78「はるかすみ」歌が8「はるたつと」歌の次に重出しているが、葦手本においてはそのような重出歌は見当たらない。

第三点目。諸伝本の内容的変遷を通時的にみたとき、時代が下るにつれて詳細な注記を有する伝本の存在が顕著となる。三木雅博氏は、「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、唐人の作品の場合、原則として詩句には作者名が注されていても賦句のみには作者名は記されない旨、指摘された。⁽¹²⁾しかし、次に挙げる注記（当該箇所には傍線を付す）のごとく、戊辰切・久松切・山城切には唐人の賦の作者名にまで調査が及んでいたことが知られる。①240の戊辰切、②479の久松切・山城切には「公乗億」の名が注されているが、葦手本の注記には唐人の賦句に作者名が注されている例は見当たらない。

① 240 公乗億（戊）

八月十五夜賦（下）

ナシ（雲・関・粘・伊・久・山・多・葦）

② 479 送友人帰大梁賦 公乗億（久・山）

送友人帰大梁賦（粘・法・太）

送友人帰大梁賦（雲・関・戊）

ナシ（近・伊・葦）

第四点目。安宅切・卷子本・定信筆大字切では、「追補」⁽¹³⁾とされている652の次に位置する和歌「伊可天難遠人二裳登者むあやしきはおも盤ぬな可能えさ類ましきは」⁽¹⁴⁾を共有しているが、葦手本にはそれは見当たらない。

特に、伝本の性格を決定づける本文の面から葦手本と近い関係にあると思われる戊辰切には、後世的な改変のあとが確認されたが、葦手本はそのような変容した様相は呈しておらず、古い形態を止めていると推測されるのである。

五

葦手本には、唐紙切2、及び、戊辰切・卷子本・安宅切との連関性が認められたが、書写の面からも同様のことを指摘し得る。すなわち、既述したように、葦手本は藤原伊行の真筆であり、また、戊辰切の巻上は葦手本と同じく藤原伊行、巻下は藤原定信の筆という説もある⁽¹⁵⁾。

唐紙切2については藤原伊房(二〇三〇—一〇九六)の筆という説があり⁽¹⁶⁾、卷子本の書は伊房やその孫に当たる定信の書に気脈が通じているとされている⁽¹⁷⁾。また、安宅切も、藤原定信の筆という説がある⁽¹⁸⁾。伊房・定信・伊行は書の家柄である世尊寺家の第三代・五代・六代に当たる人物で、この四本の書風は世尊寺様といえる。書風に加え、これら四本には次に例示するごとく、和歌の真名書きという特異な表記を共有している点でも共通性が認められる。

① 259 葦手本「白雲尔翼打加者之飛雁乃影佐部見留秋夜月」

唐紙切2「白雲尔翼打加者之飛雁乃影佐部見留秋夜月」

卷子本「白雲尔翼打加波之飛雁能景左部見留秋乃夜能月」

② 673 葦手本「斑鳩之鳶雄蝦蟇之絶蟠社我王之御名遠忘海藻」

戊辰切「斑鳩之鳶雄蝦蟇之絶蟠社我王之御名遠忘海藻」

また、次に、688より諸伝本から「囀」を引用するが、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本には次の事例のごとく異体字の類似もみられる⁽¹⁹⁾。

雲紙本 関戸本 粘葉本 近衛本 法輪寺切 伊予切 久松切



安宅切

卷子本

太田切

多賀切

戊辰切

葦手本



安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本のうち、卷子本のみには口偏は無いものの、旁の部分の字形は類似している。

以上、葦手本・唐紙切2・戊辰切・卷子本・安宅切の五本を世尊寺家、及びその周辺に継承された伝本の流れを汲むものとして位置付け得る。

葦手本が雲紙本類と近い関係にあることは確かなことと言える。しかし、葦手本は粘葉本類の要素も有しており、その一群の中に位置しつつも雲紙本類とは並列の関係にあると考えられる。粘葉本・雲紙本両類の要素を有する伝本にはその他、十二世紀の書写とされる久松切・安宅切・卷子本・山城切・戊辰切等も挙げられる。そのうちの戊辰切・卷子本・安宅切、及び唐紙切2と葦手本とが近い関係にあることも本節中、確認した。ただし、戊辰切・卷子本・安宅切に見られる後世的要素は葦手本には見当たらなかった。また唐紙切2が先学によつて指摘されている通り、藤原伊房の真筆、または伊房の時代の書であることが事実であるならば、葦手本は比較的純度の高い唐紙切2にまで遡り得る性格を有していると考えられる。

ところで、久曾神氏は葦手本・卷子本・久松切等を「再稿本」であると述べられた。しかし、本節中、指摘した通り、粘葉本・雲紙本両類に見られる個々の本文が葦手本・十二世紀書写本群の中に混在していることが判明した。また、葦手本・

巻子本・久松切等には詩歌句の有無、排列にも異同があり、それらの事例から、一括して「再稿本」とする、その捉え方では整合しないと思われる。

なお、①十二世紀書写本群ではいずれも雲紙本類と粘葉本類との相違の中で重視されるべき箇所である巻上、春部巻末の三詩歌群の排列が雲紙本類と同じである、②他本にはあるが雲紙本類にはない詩歌句のうちのいくつか、十二世紀書写本群の中にも雲紙本類と同じように存しない、③十二世紀書写本群にはそれぞれ粘葉本・雲紙本両類の本文が混在しているということについて、本節中、指摘した通りである。

堀部・久曾神両氏の分類に従い、粘葉本類、雲紙本類という二つの類を中心に据えて、その他の諸伝本の分類を試みる場合、前述した①・②・③の事象は、雲紙本類の流れを汲むと考えられる十二世紀書写本群の中に粘葉本類の要素が後に徐々に混入した結果を示しているかのように見える。しかし、それだけではないと言えるのではなからうか。

粘葉本・雲紙本両類が有する要素の混在は、本書（第三章第十節）中、指摘する通り、既に十一世紀中葉の書写とされる伝行成筆大字切に確認され、草手本が書写された十二世紀よりも早い段階で行われていたことが判る。また、本書（第二章第六節）中、指摘する通り、形態・個々の本文の両面において、粘葉本類にしか見られない要素、雲紙本類にしか見られない要素が粘葉本類・雲紙本類、それぞれに少なからず確認される。「徐々に混入した」のであればそのような事象は生じにくいかと思われるのである。

粘葉本類と雲紙本類とが混在した姿の伝本が粘葉本・雲紙本両類が書写された時代に既に存在しており、またそれらが草手本を含む十二世紀書写本のもとになった可能性もあると推測する。

注

- (1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕312頁
- (2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕195頁
- (3) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の和歌作者考(一)」『愛知大学文学論叢』第六二輯〔昭和54年 愛知大学文学会〕
- (4) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは422の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (5) 313、無
- (6) 本書(冒頭の凡例)中、記した通り、唐紙切2とは、伝藤原公任筆唐紙本和漢朗詠集切を指す。
- (7) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕「卷上」219頁
- (8) 前掲(注1)に同。331頁
- (9) 山内潤三・木村晟・枳尾武氏編『和漢朗詠集私注』〔昭和57年 新典社〕・枳尾武氏編『国立国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫蔵和漢朗詠集私注漢字総索引』〔昭和60年 新典社〕
- (10) 断簡のため題目「氷」の有無については不明。
- (11) 前掲(注1)に同。322頁
- (12) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕145頁
- (13) 前掲(注1)に同。318頁
- (14) 安宅切の本文に拠る。
- (15) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻〔平成2年 講談社〕345頁
- (16) 古谷稔氏「藤原伊房」〔東京国立博物館編『ミュージアム』一六九号〕〔昭和40年 美術出版社〕

(17) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」351頁

(18) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』83「昭和59年 講談社」79頁

(19) 「囁」を検すると、『康熙字典』には、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本に酷似した字体が存する。しかし、『康熙字典』では旁の部分の上部(右)は「刀」で、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本のごとき「刃」とは異なる。安宅切等の字体は、当時、特異であったといえるのではなからうか。